



漢字の「芸」は、戦後「藝」の略字に混用されたが、本来は「うん」と読む。江戸期に渡来したミカン科のヘンルーダは和名を「芸香」と言い、強い香気から葉にすると虫喰いから本を守るとされた。それ以前から「倭名類聚鈔」に「芸香」「和名久佐之香、香草也」とあるように、香りの強い草木を「芸」と呼び、やはり本の虫除けに利用した。転じて「芸」は書物や書齋を指すようになったが、その早い時期の用例が、奈良時代末に石上宅嗣が設けた「芸亭」である。

大納言正三位兼式部卿石上朝臣宅嗣「」捨其旧宅以為阿闍寺寺内一隅特置外典之院名曰芸亭。如有好字之徒欲就閱者恣聽之。（『続日本紀』巻第三十六、光仁天皇天応元年辛亥）
大納言で式部卿の宅嗣は、旧邸を寄進して阿闍寺を建てた。その一隅に芸亭と称する書庫を設け外典を収めた。好字の士は、誰でも自由にその蔵書を閲覧することができた。（現代語訳引用者、以下同じ）

芸亭は日本初の「公開図書館」と称されるが、さらに注目されるのはその蔵書である。仏典（内典）ではなく、外典すなわち儒教の教典が収められていた。そこには宅嗣の強い思いがあった。

内外両門本為一體。「」為助内典加置外書。「」庶以同志入者無滯空有兼忘物我（同右）
仏教も儒教も目指すところは本来一つだ。寺に儒教の教典を収めたのは、仏教の理解が進むようにと願ったこと。ここに集う好字の士には、仏教の教理にとどまらない、広い視野を持つてほしい。

芸亭と蔵書に込めた宅嗣の理想は、将来を担う若い世代にも向けられていた。

異代来者超塵勞歸於覺地（同右）
（若い人々には、俗世を超えた高邁な気概を持つてほしい。）

その芸亭は、京都に都が遷ると、ほどなく廃れてしまったらしい。それから約1200年後の1971（昭和46）年、「芸亭伝承地」の顕彰柱が奈良県図書館協会によって建てられた。「芸亭の趣旨が今に生かされるよう」「」記念する」と説明されている。その場所は、若い人たちが学ぶ、奈良市立一条高校に隣接している。書籍に込めた宅嗣の願いは、時を超えてなお、奈良の地に生き続けていたのである。

（編集責任者）



写真：奈良市立一条高校前「芸亭伝承地」顕彰柱

広い視野と高邁な理想を

— 「芸亭」に込められた宅嗣の願い —